

# ——深求・川にちなんだ万葉集の歌——

## 万葉の川心 第8回

まん よう

かわ ごころ

下総国(しもつぎのくに)の歌(うた)〈東歌〉

下毛野安蘇(しもつけのあそ)の河原よ

石踏まづ空ゆと來ぬよ汝(そらき)が心告れ

(巻第 四 三四二五)

立ち上(じりあ)がつた  
士手に止めてあつた自転車に乗り  
そしてゆっくりと流れ出した

「どうして河原に来たのだろう。空ならどこでも見れるというのに。」  
草の海に飛び込んだまま もう秋に近いこの空を飽かず眺めている  
都會の喧騒も疲れた心も 視界に広がる一面の青空に吸い込まれていく  
鳥が流れ 雲が流れ 風が流れる  
宙に浮かんだ心も流れる  
つれづれの物思いは  
遮るものない空に  
尽きることなくあふれ出る  
青空のせつなさに思わず身を起こすと  
川は静かに地を抱いて流れていた  
通りすぎるレガッタを見送つて  
また静かに空を見上げた

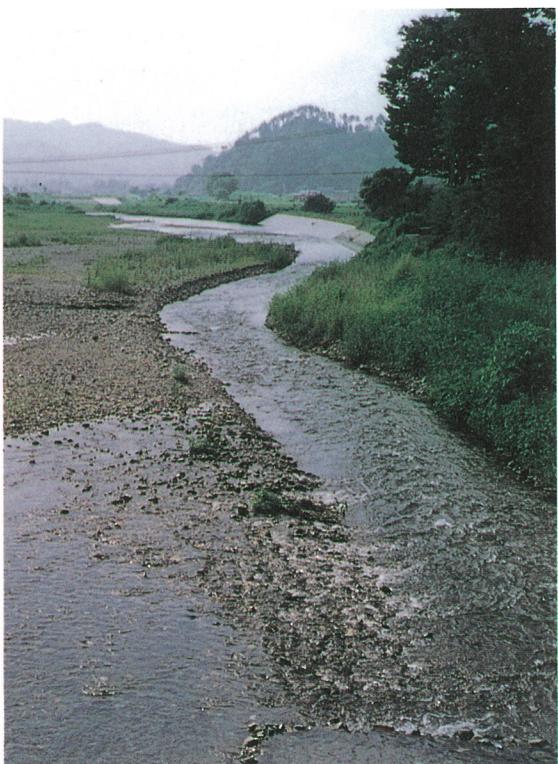
詠まれたこの歌は、説明の言葉をなくしてしまう程に真っ直ぐで純朴で、  
詠んだ心と歌をもらう心が一時に胸に迫ってきて、せつない。  
安蘇の名は「麻」に由来していると言われ、もう一首次の歌が詠まれて  
いる。

上毛野安蘇(かみつけのあそ)の真麻群(ましまぐん)かき抱き寝れど飽かぬを何(いだね)か吾(あ)がせむ  
「かき抱いて寝てもまだ満ち足りた心地がしない。ああ私はどうしたらいいのだろう。」「あ」や「ぬ」の音によって、もどかしさが耳からも心に響いてくるこの歌は、麻の匂いの込める初秋の畑で、丈の高い麻を抱くようにして刈り取る姿を、恋しい人をいだく姿に重ね合させて詠まれている。労働が恋歌へと導かれ、東歌ならではの素朴さと暖かさが直截に伝わってく。本来安蘇が下毛野なんか上毛野なんかは定かないが、安蘇と呼ばれるこの辺りは麻の栽培地であり、この二首は、そこで働く人々に深く愛されたことだろう。

まわりのすべてが流れていると感じたとき

「下野の安蘇の河原の石の原、踏んだ気もせず、宙を飛ぶ想いで来たの  
良瀬川に合流する秋山川のことである。君を想い、「河原の石を踏んだおぼえがないほど」に「空を飛んできた」という。ほほえみが涙になるような瞬間を、それは美しく表現している。

「下野の安蘇の河原の石の原、踏んだ気もせず、宙を飛ぶ想いで来たの



葛生町を流れる秋山川